

6 質疑応答の概要

(小松議長)

それでは時間となりましたので、再開したいと思います。新居浜市長がお見えですので、最初にご挨拶をお願い致します。

(佐々木委員)

皆さん、こんにちは。新居浜市長の佐々木でございます。いつも高専の皆様方にはお世話になって、ありがとうございます。ちょっと座らせて頂きます。

今日は東予産業創造センター、こちら新居浜高専には大変お世話になっているのですが、評議員会がございまして、センターの方の私が理事長をしておりますので、そちらの方の会に先に参加をさせて頂きました。また、一応地元だから、基本的な事は分かっているだろうという、ご配慮も頂いているのだろうというふうに思います。高専と新居浜市との関わりというのは、言うまでもなく、新居浜市唯一の高等学校を卒業して以降の高等教育専門機関として、私達にとっても大変誇りに思っている学校でございます。これまでも、教育の分野、行政との連携、そして産業界との連携ということがテーマでございましたけど、昨年、高専との協定も結ばせて頂きまして、より一層その絆も強くなっているというふうに思っています。

教育の分野でも小中学校の教師の方々に対する数学とか、そういう講座を開いて頂いていますし、行政も連携協定ということもありますし、先生方の専門性を生かした行政分野への参加も頂いています。

産業の分野でも産学官連携の要として、より一層、これから連携を深めさせて頂きたいというふうに思っています。これまでも連携の下、事業を進めさせて頂いてきておりますが、これからもより一層、私どもの方へもまた何かご要望やご意見があったら、お聞かせを頂きたいというふうに思っています。

今日は大変遅くなりましたが、宜しくお願い致します。

(小松議長)

どうもありがとうございました。それでは今から一時間ほど自由に懇談をしたいと思います。最初に学校側から色々説明をして頂きました。それから、ただ今、色んな施設を見学させて頂きました。それらを踏まえて何からでも結構ですから、ご意見がございましたらお出し頂きたいと思います。

ご自由にどうぞ発言をお願い致します。

(庭野オブザーバー)

住友化学庭野でございます。オブザーバーではございますけれども、今日、非常に工夫をされた色々な取り組みをされているのがよくわかりまして、大変ためになったと思っております。今日お話の中、また見学させて頂いた中で、いくつか質問させて頂きたいのですが、最初の目標の中のチャレンジ精神、アイデアを目標にして、これは非常に会社でも重要なポイントでございまして、その中で見学の中からミニロボコン、あれを見ますと、非常にそういうところを良く、ああいう授業の中で培われているのかなと。機械系、電子系では確かに理解出来るのですが、生物・化学系ではどういうチャレンジをされておられるのかなと、ひとつ・・・。

(河村教員)

先程、教務主事の桑田先生からお話があったと思いますが、生物応用化学科では来年度からセルフブ

ランニング実験に取り組む予定にしています。ご指摘のように生物、化学の分野においては、創造性教育に向けた取り組みがほとんどなされていないように思います。これまでの学生実験は、実験書を教員側で作って、それを学生に読んでもらって、書いてある通りに実験をしてもらうというやり方でした。セルフプランニング実験では、教員側は目的というか、こういう実験をしてくださいということだけを伝えて、実験方法については学生に調べてもらう、つまり学生自らに実験書を作ってもらい、実験を行なってもらうことから始めたいと思っています。以上です。

(庭野オブザーバー)

非常に面白い取り組みだなという気がします。

私ども化学会社ですから、ちょっと不安というか心配していますのは、大学の先生方が特に最近困っておられるのは、法人化した事で、法対応が結構面倒、消防法とか高圧ガスとか、ああいうのはキッチリ皆さん色々資格を取られて、やっておられるのでしょうか。

(小松議長)

安全衛生ですかね。それは我々の悩みですね。いかがですか。

(中川教員)

安全衛生につきましては、以前より住友化学生産技術センター長である石丸さん始め、色々な方にご相談致しまして、一昨年度から専攻科につきましては、リサーチ・フェリー・リーダーの田中さんに来て頂きまして、そういう教育をして頂いております。またさらに、安全工学に対する新しいカリキュラムを、来年度から正式に導入を予定することも考えていますし、一方、経営工学というのが5年生にございます。今年度から始まったのですが、平成17年度からは、企業における最先端の、そういう安全教育を担当されている方に来て頂いて、それを講義の中で2時間位して頂いて、企業の入口から最終的な出口まで、いろんな事を、その間に勉強してもらいたいと、そういう事を考えております。以上です。

(校長)

学校の全体の取り組みとしましては実験とか体育、地震等の自然災害の時の対応等の安全マニュアルを改めて教職員用と学生用に分けて、作成、配布し、安全教育を徹底したいという事です。また、労働安全衛生法関係の対応については、色々労働基準局等の指導を得ながら、今まで国立だったからしなくてすんだことをも含めて、対応面で遅れを取らないように進めているところでございます。

(小松議長)

はい、どうもありがとうございました。その他何かございませんでしょうか。ご意見でも、あるいはご質問でも結構です。

(保手浜委員)

中学校出た子が、これほどになるのかなという大変高度な専門的な事柄を勉強させて頂きました。16歳17歳から20歳までと5年間の年齢差がありますので、ご指導も中々大変だろうと思いますけれども、その年齢差を学内で活用されて、今ご説明の中に放課後の授業時間外の学習支援というのがございまして、上級生が下級生を指導するという大変良い事だろうと思うのですね、高専のような年齢差が5つもあるからこそ出来るのかなというふうに思っていますが、この点について今後ご検討の必要もあるのだというふうな、お話でございましたけれども、非常に良い面とか今後改善をする必要があるというよう

な事などございましたら、ご説明頂けたら大変ありがたいと思います。

(桑田教務主事)

先程、上級生が下級生を教えるという、一番大きなのがTA制度、あとその他、特にクラブ活動も1から5年生まであるとか、そういったことが一般の高校とは違って、本校では1年から5年、もしくは専攻生が入ると7年という、7歳の違いがあります。そこらあたりを有効にやっていきたいということなのですが、TA制度について現在やっているのは、専攻生、5年生が、1、2年生の数学・物理を面倒見るという事で、実施しているのですが、なかなか専攻生、5年生の方はやる気になって、非常に良いのですが、どうしても1年生、2年生の方が、受身的な考えになっておりまして、無理やりやらされているとか、そういった点が、もう少し自分の為になるのだという事の意識付けが出来れば、上手くいくのではないかと考えております。今後考えているのは、来年度から習熟度別授業を数学の方に導入します。その際、数学の先生方の補習もありますので、そういった手伝いを高学年の学生にやってもらうとか、またオフィスアワー制度、非常に多くの学生が質問にくる時期というものがあります。試験の前とかそういった時には・・そういった時に先生一人ではなかなか、いろんな科目を持っていますので、対応しきれない場合があるというふうな話も聞いていますので、そういった所に少し上級生が手伝いしてくれればという事と、もう一つは先程報告しました通り、電気情報工学科では、夏休みにそういったグループに、1年生と上級生を入れて、ひとつの事に取り組むというようなクラブとは違った物作りに取り組むとか、当然今やっているロボコン・プロコンあたりはそういう事もやっているのですが、もう少し小さくて良いから、本校でそういった取り組む機会を多く提供したいと考えております。

(校長)

要するに異学年交流というのが大切だと考えております。今の子供は、そもそも同一年齢の者、しかも少人数の者との間しか付き合いが成り立たないという傾向が非常に強いんですね。中学校時代も小学校時代も同一年齢の仲間の中で育ってきていることが背景にあります。私どものような学校の中で、今、教務主事の方からちょっと勉強面の話を中心に話をさせて頂きましたけれども、学園生活全体の中で、異年齢での活動をプロジェクトという形で展開し、社会性を培うとか、自主性を培うところに持っていければ、と思っています。また、先ほど少しご説明しましたが、外部の方に色々ご協力頂くことも大切だと感じており、教育面についても教育アソシエイトとか、地域連携アドバイザーというような制度を新年度から作って幅広くご協力をお願いしようと思っています。いろんな地域の方にお加わり頂く事によって、非常に幅の広い人間対応能力というのですか、そういうものが育てられるのではないかと考えております。

(小松議長)

どうもありがとうございました。他に何かございませんでしょうか。

私からひとつ・・入学者の確保というのはかなり大きな課題だというふうにお聞きしたのですが、思っていたより、志願者数というか、倍率が低いようですが、全国的にこれは同じような傾向なのですか？それとも特殊性というか・・・。

(校長)

高専機構の中期計画に具体的な数値が実はございまして、具体的には志願倍率が2倍というものです。全国で2倍ぐらいの志願倍率を確保して、そういった中で質の高い学生に来てもらおうというような事

を高専機構全体で考えている訳でございます。これは学校のおかれている地域の状況によって、かなり違ってきておりまして、一概にそれをすべての学校に当てはめるのは若干の課題があるかと思っております。ただ、私共として、今年の場合、志願倍率1.5ということでございますので、もう少し頑張りたいというふうに考えております。目標数値をもう一度正確に申し上げますと、高専機構としては5年後に15歳人口の減が5%マイナスですので、入学志願者倍率を1.9倍は確保したいというのが、今計画になっております。

(小松議長)

それで倍率が下がっているという事も、少子化という事があるのでしょうか、どうですか、質という面では・・・。

(校長)

基礎学力という事について、やはり課題のある学生の割合が増えています。これは比較論になります。どの時点とどの時点とを比較するかにもよりますが、やはり現実問題として考えてまいりますと、例えば、留年・退学の具体的な数字について、先ほど十分ご説明しなかったので、教務主事の方から説明してもらおうと思っておりますけども、やはり低学年での留年、低学年での進路変更というケースが増えているということは確かです。その原因の一つには、基礎学力の不足という事が背景にございます。それから、高専を選ぶという事、つまり自分の進路選択を中学校の段階で選ぶことの困難さが以前より今の子供の方が大きいというような問題とか、いろいろ複合的な問題もございます。状況について、もう少し具体的に教務主事の方からご説明を致したいと思っております。

(桑田教務主事)

それでは申し訳ありません。この青いファイルの資料のNo.9のところの109ページをお願いします。

こちらのほうに年度別の留年・退学のデータを示しています。グラフが無くて申し訳ないのですが、グラフ化すると良く分かるのですが、2年生当たりからのやはり進路変更者・留年者というのが非常に多くなってきてまして、ずっと以前は3年生での進路変更というのが、ほとんどっていうような状態がずっと以前はありました。ですから、本校3年生で進路変更する場合は一応高卒と同等程度という資格で、進路変更できたわけですが、最近は低学年での進路変更者が増えてきている。そうしますと、高卒同等の資格が取れませんので、どうしても大検等をその後、受けるという事が余技なくされる状況にあります。その原因について、もう少しきちっと分析して対応していかなければと思うのですが、一つは、やはり本校に本当に向いてない子が中学から入っているんじゃないかという事で、本校のPRの仕方、そういった物について、少し検討する必要があるというふうに考えております。また、もう一つは本校に入ってから、その学科等に対して、高専に対する意欲的なものが半減している、目標を失ってしまっている状況が見られます。そこは本校での問題だと考えておりますので、そういった場合に如何に目的意識を持たせていくかというような事についての検討も必要かと思っております。そういった事で、具体的にこうしたい、こうすれば良いっていうものが、まだ具体的なものが出てないんですけど、そういった事の二つの方向からこういった低学年での進路変更者を無くしていきたいと思っております。留年者に対しましては学力の支援を十分にしていくという事で対応していった、やはり卒業するところのレベルは現状を維持したいというふうに・・・やはり社会のニーズで今の求人倍率等を考えますとやはりこのレベルを維持しているから求人にきてくれていると思っておりますので、そういった事で出口で

のレベルは維持した状態で、そこまで如何に多くの学生をもっていくかという事を検討していきたいというふうに考えております。ちょっと抽象的なお答えで申し訳ありませんが、以上でございます。

(岡田委員)

わたくしも今日初めて伺って、正直言うとこんなに色々な展開をしてらっしゃる、地域との連携を含めてですね、全体を伺ったのは初めてで、こんなに色々な形の展開をしているのだな、というふうに思いました。どちらかというところの中身を肉付けしていく事が課題だという話もありましたけれども、今の学生さん達というのでしょうか、あるいは若い人達というのでしょうか、必ずしも昔の・・・それこそ例えば我々の時代に比べて今の若者はっていう言い方があるのですが、目的意識というかですね、勉強しないと良い大学は入れないよ、勉強しないと良い会社入れないよ、というのはもうたぶん今はあまり通用しなくて、企業でもややそういう部分があります。つまり、入社して何年かの間、単純作業のような事というか、あるいは補助作業のような事をやらされたりもするのですが、何のためにこんなことやられているのだ。企業なんかの場合は、すぐにその次のステップが見えていたりするのですが、それでもなかなかそれが我慢できなかったり、ついて来られなかったりする人がいるのですが。学校の場合でもですね、今これが何のためにやっているのだろうかっていうのが、分かるかどうかというふうに思っていますね。若い人でも目的であったり、目標が極めてはっきりしていると、一日千回素振りすれば宮里藍のようになれると言った途端に今の若い人でも一日千回でも素振りしちゃうわけですね。同じように、例えば高専なんかの場合でもですね、これがどういう事に繋がるのだっていう明確な像みたいなものを持たせられるかどうか、持たせられれば、一見単純に見えるような学習でも皆ついてくるのではというふうに思うのですが、そこを一番ご苦労されている事とは思いますが、先程もありました、例えば地域との連帯みたいな事を具体的に外との繋がる事によって、具体的なものが形として出てくる事の達成感とか、あるいはいくつかの試みが、先程もご説明あったと思うのですが、その辺の学生の目標の持たせ方というかですね、その辺はこうどんなふうに考えられているのかというかですね、お聞きしたいなというふうに思っております。

(桑田教務主事)

非常に難しい問題で、ちゃんとしたお答えが出来るかどうか分かりませんが、新入生にアンケートを取りますと、非常にこうしたい、ああしたいという目的を持って入って来ているように思います。ですから、こういう会社に行きたいとか、大学に行きたい、編入したいとかいう目的が、新入生のアンケートに出ているのですが、それがやはり4年後、5年後の長期化した目的、それを持続出来ないことが問題です。ですから短期間の目標を本校で、小刻みな目標を立てて、それを達成させていくことが大切で、それで先程言われた、自分が達成できた！という感覚、そういった事を感じさせるのが一番必要であると思います。また、授業科目においても同じです。例えば、こういった難しい数学やって、社会に出て何の役に立つのですかっていう質問も多くなってきました。ですから、これはこの次の科目のココで使う、というような事や社会に出てこういうところでとか、明日ココで使うのですよ、っていうような事の繋がりと良いかな、というふうには考えているんですけど、なかなかその点、目的意識を持たせるのは非常に難しい。ただ持った学生にとっては放っておいても大丈夫っていうふうになっているのも事実ですので、より多くの学生にそういった目的意識を持たせるっていうのは一番の課題だと思っています。具体的にはちょっとお答え出来てないと思うので、申し訳ないですけど。

(檀上学生主事)

私どもの学科、電気情報工学科というところでの例をお話致しますと、何か1年生の時から実習というような事を入れておりまして、クラス半分に分けまして、半分は実習、半分は授業の演習というような形で、授業の演習は少人数で、アドバイザーに分けて7、8人ずつというような形でやっておりまして、その実習を通して何か物に接するというような事を通して、何か達成感を持ってもらおうと、というような事を試みとして、やっております。例えば、その中で電気の実習なのかっていうふうな感じでいわれるような事もあるのですが、例えば、ちょうど三角関数を習う時期に非常に難しい、三角関数は難しい、1年生で習うのは非常に難しいってというような事がございますので、外に出て山を測量しまして、角度を分度器で測りまして、それで高さが分かるのだよというような事で、三角関数の事を実際に体験させてみたりとかですね。そういった事で、ある程度自分達が学習しているのはどういったところに役立つのかという事を体験させるような試みをやっているのではあります。またそれが、本当に全部が全部に上手くいっているかどうかというのは非常に難しいところですが、そういう試みもやるのは、やっております。

(校長)

専門についての導入教育というものをどのように始めるか。これは、各高専の共通の課題になっています。特に中学校を出た後の段階では理論からだけ入っていても必ずしもうまくいかないという事があります。先程実習工場で見えて頂いたような形の実習を伝統的にやってきたわけですが、もう少し商品、例えば自転車であったりしますが、そういう完成品を分解して、それぞれのことは習っていないけれども、自分達がどういう事をこれから習うのか、具体的に目に見える形で意識付ける為の授業と申しますか、つまり将来この部分はこういう原理で出来ていて、例えば自転車でも機械的なことばかりでなく電気をおこすところもあるわけでございますから、そういう事を解説してやる事によって、自分達がこれから学んでいくことについて見取り図を学生が描きやすいようにするとかが必要になってきていると思います。私どもの学校も学科によってそれぞれ工夫しながらやっているわけですが、その辺の研究をもっと進めないと、なかなか対応が難しい時代だというのは、ご指摘の通りだというふうに思っております。

(小松議長)

いかがですか。なかなか、教育のやり方っていうのはどこの大学も大変難しい段階なのですけども、私の印象からいうとやっぱり国立の学校なんですね。どうも利口な良い子を作ろうというかね、そういう意識が非常に強く見えるんですよ。例えば教育目標ね、問題設定・問題解決能力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力、これを育成する。これは国の提言している事なのですね。もう少し一芸に秀でるとかね、好きな事とことんやらせるとか、そういうユニークさというものがあって良いような気がしたのです。あまりにもお利口さんを育てるような教育になってないかという感じがしました。少し乱暴ですが・・・。

(校長)

私共が今日、これまで説明してきたことは、かなりの面で今の社会的要請への対応を中心に、整理して説明をしてきたことはおっしゃるとおりだと思います。それで私共の高専の学生の学習や生活の態度という事から、少し説明をさせていただきます。一芸に秀でるといえるのか、何か一つの事を集中してやる為

には、やはりその前提として自主的に学ぶ基本的な生活の姿勢が必要だという気がいたします。今の学生にはそのところが実はちょっと欠けているところがございます。正直に申し上げますと、基本的な生活習慣の形成というところにかかわりますが、やはりエネルギーをある物に向けられる人間という為の前提の教育を、最近の流行の言葉でいう人間力の育成みたいな事が欠かせないと実感しています。高専の教育には後期中等教育の段階も含まれますので、人を育てる部分、乱暴なやり方、またお利口さんを育てるやり方、色々あるのでしょうけど、いずれにしろそこがどうしてもいるということだろうと思います。学生指導をしている学生主事などから、もう少し具体的な話をさせて頂くと、もう少し分かりやすくなるかと思いますが、そこに課題があらうかと思います。それで学生に対しては、出来ればもう少し思い切って、自分のやりたいことをやって欲しいと、チャレンジプロジェクトとか、高専アイデア通りプロジェクトだとか、色々こちらの方で水を向けているのが現状でございます。そこで、学生が本当に自ら考えてやろう、というような事が出てきたら、すばらしい事だというふうに、私共も受け止めてやっています。

（壇上学生主事）

具体的な例っていうのはあまり思い浮かばないんですが、数年前に私共が・・私が卒業研究を受け持った学生さんなのですが、ロボコンを非常にやりたいっていうので、高専に来た。それで、小学校1年生の時から、ベーシックのプログラムとか、そういうのをやっていたっていうような子が来まして・・その子は成績は良くないのですよ、正直いって半分以下ぐらいの成績で卒業したのですが、しかし自分がやりたい事についてはとことんやるので、もう黙っていても任せられる訳ですね。これでこういう物を作ってくれよって言ったら黙っていても、どんどんどんどん作っていつてくれる、というようなところで、そういう学生がどんどん育ってくればいいなっていうのは私共の仲間の内では良くそういう話をするんですが、そんなにいわゆるお利口さん、どの勉強も良く出来て、点数が高いとかいう子ではなくて、とにかく自分のやりたい事は一所懸命やると、いうような子が望ましいっていうのは、もう私共非常にご指摘の通りだと思うのですが、そういうのを育てたいっていう事もあって、チャレンジプロジェクトとかアイデアどおりプロジェクトなどへいろいろ応募してくれるように、というふうに声はかけているのですが、なかなかみんながどんどんそれに参加していきましようというふうな状況にはなっていないのが実状でございます。

（佐々木委員）

質問という事でもないのですが、高専の人の社会性というか、そういう意味で、去年私もある高専の生徒と4、5人で話す機会があって、それは自分達でお店をやりたい・・お店というか、稼ぐお店ではなくて、ご存知だと思いますけど、今、昭和通りでお店というか・・出して、高校生とかそういう人達といろいろ話してみたいし、自分達も何か役に立ちたいのだという話を、もう一年くらい前にちょっとお会いして聞いて、我々も何とか出来ないだろうかというので、公募制の事業に応募をしてもらったのですが、実はそれは落ちてしましまして、でもそういうところで初めて、自分達の考えをプレゼンテーションしてみて、非常に良い経験になったと。その後、実際に昭和通りで開いて頂いて、今、高校生とか中学生なんかも土日とかそういう時ですけど、行って、20歳ぐらいの高専の生徒さんとかに色々話を聞いてもらって、非常に良い方向で、やって頂いているというのがありまして、次期社会の中でのそういう役割とか、そういうものを非常にあいつた形で発揮して頂けるというのは本当にありがたい

な、というふうに思っております。で、20歳までのところは、なかなか行政の参加っていうのは実際ないんですけど、これから専攻科の生徒さんもいらっしゃるから、先生だけじゃなくて、高専の学生さんに何か我々のやっているような会とか、そういうところに参加をしてもらうような事も考えたいなと思うし、かなり意図的に行ってお願いをして出してきてもらうような形からでも、スタートをしたいなというふうに思っていますので、またそういう面でのご協力も宜しくお願い致したいと思えます。

(小松議長)

その他、何かございますか。

学校の施設や研究、教育内容など先程、色々見せて頂きまして、教育内容だとかやっている事が非常にユニークだし、多様性がある面白いと思うのですよね。だけど、あまり世間に良く知られてないのではないかと・・・その辺はどうですか。我々国立大学っていうのは、みな同じなのですが、宣伝がとっても下手でしてね、今までそういう事をしたことがないので、これからの課題だと思うのですが、その辺はどうですか。

(校長)

反省しております。

本当に、情報発信という事がまず基本的でないといけませんね。私共、中学校の先生方とお話をしても感じるのですが、高専の事をやはり本当ご存知ない。でも私達はそれを嘆いているだけでは駄目だという事ですね。その事は私共が本当に高専の教育に向けた生徒に来てもらう為にも必要だし、ホームページなど、いろいろ改善しようと努力はしておりますけども、まだまだ分かりにくいということだろうと思います。そこで、もう私などはモニター制にして、時々ホームページなど見てもらって、何かこれでは分かんないじゃないかと、もっとこういう事を知りたいのにと、いろいろ意見を出していただいて、それを吸収する仕組みなどを整えるべきだというような事を思っています。それから、近年マスコミの方々に高専の話題を提供するという事を意識的にやっておりまして、ケーブルテレビなどでの報道等とか身近なところも含めてですが、市民の方から最近、高専のニュースが多くなったね、というような反応を頂けるようになってまいりました。ただ、高専生の良いところに光を当てて、学校の話題というよりは学生の話題をできるだけ発信していきたいというふうに思いますね。

(岡田委員)

私も本当不勉強なものですから、今日お話を伺って、そういう部分を少し重点に伺ったのかもしれないんですが、印象としては独立行政法人になった事もあるかもしれませんが、高校に近い大学に近いと言われる、大学の方に近いかなというふうな感じが、ちょっとしたんですね。もちろん生徒さんは、高校生の年齢の人達がいるわけですから、先程両方またがっているご苦労もあると思うのですが、わたしも正直言うんですけど、今日ココにお伺いするまでは、高専というのはやっぱり高校だよ、っていうふうに・・・どちらかといえば高校に近いっていうふうに思っていたところがあるのですが、やっぱりまだ社会の受け止め方も、もちろん高校ではなくて大学2年生ぐらいまでの5年生だっていうところまで知っているにしても、でも少し長い高校かと、というような感覚がやっぱりあるかな。でも、これから目指したり展開しようとしている事はどちらかというと、それこそ愛媛大学もですね、目指そうとされている事とベクトルがすごく似ているところがあるかなというふうに思っていますね、その側面をも

っと外に向かってPR、それは地域との連携であったりだとか、産学共同であったりとか、そういうものを含めてかもしれませんが、というような印象が少ししました。

(保手浜委員)

広報の実施については、学校訪問の説明会になんと94校行かれていて大変すごいなと思ったのですが、実際に中学校の生徒を全部集めてですね、高専の先生がご説明なさると、例えばロボコンの模型など持って来られてですよ、実際にお話なさるといって中学校の教員を介してよりは大分中身が良くわかるんじゃないかと思います。そういう意味では、中学校サイドがぜひ来てくださという事で来て頂く様になれば良いのですが、なかなか急にはそうはいきませんので、高専さんの方からですね、説明にいつでも行きますよと、行かせてくださというふうに積極的に出て頂くという面もあった方が良いのかなというふうに思いました。普通科の何校かと工業科・商業科といふに特色がある学校については来て頂いている、実際に15分ないし20分ぐらい説明頂くのです。で、ちょっと遠いのですが、出来れば松山方面の学校に来て頂いて、実際にご説明頂くと、大分違うかな、というふうに思います。

(桑田教務主事)

どうも、ありがとうございます。今後ぜひそういう時は、案内を頂きたいと思うのですが。もう一つ今、愛媛県ではまだそこまで来てないんですけど、近隣の県ではオープンスクールの方向の高校が増えてきました。直接話すだけでなく、直接来てもらって、体験してもらうというねらいです。それは本校でいう、夏季体験学習に相当するわけですが、そうしますと市内はそれで十分対応出来るのですが、近県また遠方だとなかなか難しい。ですから今後、我々も出向いて行って、そういう機会を、というような事も少し考えております。なかなか実現出来ないのですが、そういった事を踏まえて、今のご提言を検討していきたいと思っております。どうもありがとうございました。

(小松議長)

それでは、他に何かございますか。青野さん、卒業生を受け入れる側として何かご意見なり、注文なりがございましたら。

(青野委員)

特にございませんのですが、えらい細かい事で先生申し訳ないんだけどね。予算なのですけどね、チラッと先程流されたのですが、人件費の部分の一割って言いましたよね。確か努力目標かなんか、毎年一割ずつ削減するのだというふうな事を。これを見てみましたら、基本的な先生なんかの給料のカットはないみたいですが、それ以外のものについては、かなり厳しい予算を組まれておるし、施設を使つての収入ですかね、黄色い部分の帯のところなんかは、ずいぶん去年よりも予算が・・金額が上がっていますし、そういうところのバランスっていうのは、独立法人化になってくる関係と以前との学校サイドの頑張らなきゃいかん！というのは、かなりの部分なのではないでしょうか。

(校長)

この独立行政法人になってですね、一つは良くなったのは、経費の使い方ですね。人件費とその他物件費との区別など壁は残ってはいるのですが、昔は物を買うお金、旅行する為のお金、お礼に支払うお金とか、非常に細かい、いわゆる使途の指定がございまして、今年はちょっと都合が出来たのでこちらのをそちらに回すという事が自由に出来ませんでした。運営費交付金は渡しきりのお金という事で、

少し自由度が増したということもございます。ただ、問題もございまして、独立行政法人化そのものの理念の中に効率化ということがございます。それがどのような形で反映しているかということ、効率化係数ということになります。教育というものは、そんなに効率だけでやれるものではないし、しかも予算のほとんどが人件費です。へたをすると先生を減らす事になってしまうということにもなりかねませんから、効率化係数というものをなるべく小さくしてほしいと思っています。この点については、文部科学省と財務省と、いろいろ折衝がございまして、高専も一般の独立行政法人だけど国立大学と同じようなルールでいいですよということになりまして、人件費も基本的には先生の分は、若干専攻科ができたことによって増員になっている部分は保障しないけども、本科の5年間の教育をやるに必要なものは保障していきますとなりました。もちろん、事務系は人件費であってもそれは対象になりますと。その他、いろいろ設備を買ったり、教材を買ったり、また、電気代とか水道代、そういうものは1年間、1%ずつ事務系の人件費と一緒に減らしていき、というようなルールになったわけです。ただ、一方でですね、文部科学省などで、各学校が特色のある教育プログラムを計画した場合に特別に支援するプログラムができてまいりまして、それが高専にも適用になるようになってまいりました。前は大学向けにだけ作られていた教育の現代的な課題に対応しようとする教育支援プログラムについても、高専も応募しても良いと、もちろんそれには審査があって優れたものでなければ通らないのですけれども、応募は出来るというふうなことになってまいりました。それぞれ各学校が個性化する中で特色ある教育プログラムを作って、そういう資金を得ていく努力をしていくことが必要だということだろうと受け止めています。それから研究費については、今年度採択いただいた文部科学省の都市エリア産学官連携促進事業のプロジェクトのことを先ほどちょっとご説明申し上げましたけど、地域の方とご一緒になってナショナルプロジェクトなどに応募することによって、それが学校の研究費を確保することにつながっていきますので研究の活性化ということからもやっていかなければならないと考えています。与えられた運営費交付金だけですと、経費的な算式では少しずつ縮減するということになっていきますので、そのあたりを課題として取り組んでいきたいということです。

(青野委員)

はい、ありがとうございました。

それと、もう一点なんですけど、先程の留年の事もありましたけど、35%が入学時に推薦入学というふうにお聞きしたのですけれども、その方達とですね、一般入試で入ってこられた方々とのその辺のいわゆる退学者とか、留年の割合ってというのは、恐らく私の予想では推薦入学者ってというのは、そういうのは少ないのだろうとは予想しますけど、その辺はいかがなのでしょう。

(桑田教務主事)

推薦制度を導入した当時は入ってから、学力差はかなりありましたけど、年々その差がなくなってきました、現在では確かに中学校の内申点は推薦の基準を設けてますので、かなりの差はあるんですが、入ってから学力差は小さくなりました。確かに数的には留年者は少ないのは事実ですけど、0ではありません。ですからその辺が現在我々が問題でして、推薦と学力で入ってきた子が、どうなってるかっていう追跡調査は始めかけてるところでございます。推薦はそういう状況で入れますので、逆にいえば推薦の基準の見直しなどとも関連しますので、検討していくべき項目と思っております。

(檀上学生主事)

今のような事なのですが、実際問題としましてはやっぱり入ってくる学生の意識っていいですか、それといわゆる寮に入ったりとか、そういう事で親元を離れたりだとか、それから高専は高等学校に比べてルールが緩やかでございますので、そこらへんで自己規制の出来ない子供さんとかがやっぱり、そういうふうにして、なかなか勉強せずにやっていくというような場合が往々にございます。わたくし共の学生指導の方では、そういうところを一番困っているところではございます。そこらへんのところで、先程ちょっと申しましたように、低学年についてはもう少し高校並みの指導っていいですか、そういうのを導入して、高学年になるとちゃんとした学生さんとして、自分で自主的に出来るようにという方針は立てておりますが、なかなかうまく実現出来るとこまでは、なかなかいっておりません。

(佐々木委員)

今もおっしゃって頂いた事にも関連するのですが、いわゆる人事交流の話ですけどね、例えば県立高校の教員の方を受け入れるとか、市役所でいうと、ちょっと今までもお話しした事があるのだけど、この条例作って任期付き任用を市のほうで2年とか3年とかで、市の正規の職員として受け入れると。派遣するほうもきちんとした派遣が出来るというこの条例作るのですけどね、そういう市、あるいは県立のほうの高校とかも含めて、そういう人事交流っていうのは可能になるのですかね、理論上可能かという事と、実際出来るかというのとは違うとは思いますが。

(校長)

基本的には出来ます。要するに、今までの国家公務員法制とは違って、かなりそういう面の裁量性があります。ただ高専の場合は、国立大学のように法人格を学校ごとに持っていないという事がありますので、高専機構の方で一定の方針を出す必要がございます。その手はじめとして、今高専間での人事交流をもう少し潤滑にやっていく仕組みを作るとになっておりまして、その最終案がほぼまとまりつつあります。この制度は平成18年から実際に動くことになっています。それから、やはり任期付き採用です。今まで高専は大学と違ってそういう経験もなくやってまいりました。それについてもやるという事が可能になりましたので、その辺の研究をして、そういう採用形態もこれからはあって良いと思います。いくつかの高専では既に若干の試みもなされつつあります。お話しの公立学校との交流という事についてはまだ考えられてはいないと思うのですが、現実には後期中等教育のレベルの段階の学生がいるという事もあって、現に私どもが新規に先生を採用する際に、一般公募の中から現職の高等学校の先生を採用するという事は今までもたびたびございました。そういう観点で、県教委とのいろいろな話し合いの中で相互にメリットがあるという事であれば、教職免許制度の問題はございますが、実施出来るのではないかというふうに思っております。

(小松議長)

大学の附属の場合は、県教委側から選んで送られてくるという仕組みですね、それは、良い面と悪い面がありますが、交流はあっても良いと思いますね。もう少しいろんな面で交流をやっても良いと思いますね。

(校長)

また、付けたしになってしまいますが、高専によっては、教務・学生の事務関係に公立学校の先生に来てもらっているということが、例外的にはありますがございました。先生という形で交流をしているというのは今までなかったのじゃないかなと思っています。教員組織を活力あるものとして維持して

いくことは、非常に大事なことで、さまざまな形で交流することは、ひとつの有力な選択肢ではないかと思います。

(小松議長)

先程来、いろんな意見がございましたが、やっぱり高専っていうのは非常にユニークな組織だと思うのです。私はこれからの日本の技術者を育ててくのも非常に大事だと思うのです。だからもう少し宣伝して、盛り立てていくように我々もそれを心がける必要があると思うのです。ぜひ、そういう事をこれからやっていきたいと思います。今日は大変良いお話が出来たのではないかと思います。どうも、ありがとうございました。

(校長)

最後に、お礼の挨拶をさせていただきます。本日は大変お忙しい中、第一回目の学校運営諮問会議にご出席賜り、また長時間にわたりまして熱心にご討議いただき、また貴重なご意見賜りました。厚く御礼申し上げます。本日頂いたご意見をこれからの運営にも生かしていきたいと思います。また、あらかじめお手元にちょっと僭越ながら用紙をご用意させていただきました。もし、時間の関係で少し言い足りなかった、あるいはお配りした資料を後日見て頂いて、お感じになった点等がございましたら、ご遠慮なく学校の方にお送り賜れば、と思います。最後に、今後引き続きご指導賜るわけでございますので、その点につきましても重ねてお願い申し上げまして、お礼のご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

(小松議長)

それじゃ、あとはお任せします。

(事務局)

本日は長時間ありがとうございました。事務局よりご連絡致します。本日お配り致しました資料、大変厚みもございます。郵送をご希望される方は、そのまま机の上に置いておいて頂きましたら、こちらの方から郵送させていただきます。もし、持ち帰り頂く場合には紙の袋を用意してございますので、お申し出頂きますようお願い致します。本日はまことにありがとうございました。